

# 亡命地パリの意味

## ——「パリ神話」研究Ⅰ——

今橋映子

今橋映子

- 1 二十世紀と亡命
- 2 国外脱出
- 3 ドイツ人亡命者たちのパリ
- 4 窮迫と疎外
- 5 亡命の末路
- 6 「亡命文学」研究の経緯と現在

### 1 二十世紀と亡命

西欧における他者表象を徹底追求した名著『オリエンタリズム』（一九七八年）の著者エドワード・W・サイードは、昨年（一九九四）大変興味深い小論を日本のある雑誌に寄稿している。自らが一九三〇年代前半の動乱のパレスチナに生れ、のちにエジプト、アメリカへと亡命したサイードは、「知的亡命——故国喪失者と周辺者の群像」と題された同論の中で、二十世紀の亡命の特質について語っている。

亡命<sup>II</sup>追放刑 (exile) は人がたどる運命の中でも最も悲痛なものである。近代以前、追放刑はこのほか恐れられた刑罰だったが、それは家族や馴れ親しんだ場所から引き離されて何年もの間当てもなくさまようはめになるといふばかりでなく、身分外の境遇に、未来永劫にわたって置かれることを意味していたからである。(……) 追放刑と言えば、癩者や社会的、倫理的な不可触民であるのと同様の恐怖が連想されたのだ。このような亡命<sup>II</sup>追放刑が、ローマから遠く離れた黒海沿岸の町に追放された偉大なラテン詩人オウィディウスの例に見られるような、特殊な個人に科せられた峻烈な、だが往々にしてその人だけに限定された処罰から、多くの場合戦争・飢饉・疫病といった非人格的な不慮の災禍によって、共同体や民族の全体に降りかかる苛酷な処罰へと変化したのは二十世紀のことである。(鶴飼哲氏訳)

確かに二十世紀は、現在に至るまで絶えることのない、民族亡命の世紀であった。一九一五年トルコ人による絶滅政策によって流出したアルメニア人、一九三三年ナチス政権成立によって脱出した反ナチス亡命者たち、四八年イスラエル建国後のパレスチナ難民から、ごく最近の天安門事件の中国人亡命者たちに至るまで、その数は限りない。サイドは、これら二十世紀の亡命者に共通する特質として、さらに興味深い点を記述している。

亡命とは一般に、出身地から完全に切れ、隔絶し、絶望的に切断されてしまうことだと思われているが、そのような想定はまったくの誤りである。そんな外科手術まがいのクリーンな切断が可能なら、その場合は少なくとも、亡命者が背後に残してきたものはある意味で思考不可能であり、まったく取り返しがつかないと知ることが逆に慰めにもなるだろう。ところが、たいいていの亡命者が実際に直面する困難とは、単に故郷から離れた生活を余儀なくされることではなく、むしろ今日の世界では亡命といっても実際に故国からさほど遠くにいるわけではなく、現代の日常生活の正常な交通によって亡命者が絶えず故国と接していることなのであり、その接触のために、じらされはするが決して満たされない身の上を思い出させる沢山のものに囲まれて生活する

ことなのである。

二十世紀の亡命は、その原因に、まず民族全体の危機に関わる歴史的事件がある。しかも亡命先の国家と出身国との間の政治や賭引があり、交通網や情報網の発達に伴って、彼らは決して故国との断絶状況の中に生きるわけではない。亡命とは、一つの文化を喪失して、別の文化に適応していく過程をさすわけではなく、むしろ新しい社会の「想定上の均質性」に溶け込めず、中間的で不安定な分子であり続ける状態なのである。

亡命が、芸術家や知識人の人生や作品に何をもちたらずのかについての研究は、いまだ総体的なものとは言い難いだろう。従来異国に旅行、あるいは滞在した芸術家、知識人たちが、そこで何を見聞きし、考え、またそれがいかにその後の作品や人生に影響を与えたかについては、特に比較文学・比較文化の領域で多く研究されてきた。しかし言うまでもなく、異国での一時的滞在と、亡命とは、決定的にその性格を異にする。例えば、傷つき、漂泊する旅人や異邦人にとって、帰るべき場所があるかないか、あるいは自分のアイデンティティをどこに求めるのか、ということは、重大な問題を呈している。その上、二十世紀の亡命を考える際には、亡命地と故国との政治的關係、およびその亡命地の性格によって、亡命者の運命が大きく左右されることは避けられない。

本論ではその最も象徴的な例として、一九三三年以降の第三帝国亡命者たちと、隣国の亡命地パリとの關係を問ひ直してみたい。第三帝国亡命者たちのうち、ワイマル文化の担い手であった多くの有能な知識人たちが英米文化圏へ逃れ、思想、芸術、科学の諸方面で、大規模な「文化移動」が起こったことは、従来一つの研究分野をなすほど追求されてきた。

それに比べて、フランスに逃れた亡命知識人たちが置かれた状況については、後述するように近代の仏独關係の複雑きわまる歴史的事情から、独・仏双方とも、つい近年ようやく研究がまともなところである。特にフランスでは昨年（一九九四）、パリ解放五十年を契機に、ナチス占領下のフランスでヴィツシー政権が、積極的に対独協力やユダヤ人迫害を行なったという事実が明るみに出され、「自由・平等・博愛」というパリ神話や、

レジスタンス神話が、再検討されるべき問題として呈示されている。歴史的に多くの外国人芸術家や知識人たちを受け容れ、それによって自らの文化をも豊かにしてきたはずのパリが、なぜその寛容の精神を失っていったのか——本論ではナチス占領直前までの一九三〇年代に焦点を合わせ、内外の研究成果を援用しながらその歴史的記述を試みたい。

## 2 国外脱出

かの有名なドイツ人作家トーマス・マンの長男であり、自らも作家にして反ナチス亡命者として生涯を終えたクラウス・マンは、一九三三年一月三十日について、次のように書いている。

一九三三年一月三十日早朝、私は悪い予感に追い立てられるようにベルリンを去った。私がアンハルター駅に着いた時街路はまだ人影がかなりまばらだった。ねむくて気分が悪かったので、私は朝のねむたげな街にはほとんど眼をむけなかった。それがベルリンを見る最後だったのに……。私は別れを告げもせずにベルリンを去ったのだ。

行先はミュンヘンだった。が、ライプツィヒで途中下車しなければならなかった。そこでエーリヒ・エーバーマイヤーが待っていたのである。……エーリヒは駅で挨拶した時青ざめて不安なようだった。へなにかあつたのかい」と私はたずねた。彼は驚いたふうだった。「知らないのかい。ご老体はやつを指名したよ、一時間前だ。」「ご老体が……誰を？」「ヒトラーだよ。やつが首相なのだ。」（『反抗と亡命——転回点2』、平井正氏引用訳）

この運命の日、ヒンデンブルク大統領は、ナチ党党首ヒトラーを首相に任命し、ヴァイマル共和国は終わりを

告げた。そして今や誰もが知るところの現代史上最大の悲劇は、ここに始まったのである。ヒトラー政権が以後強大な権力をもつに至つた原因は、様々に説明されるだろうが、その一つに、一九二九年十月ウォール街に端を發した世界大恐慌を、やはり拳げねばならない。二十年代インフレに見舞われていたドイツは、一九二四年以来アメリカ資本の流入に大きく依存していたが、すでに一九二八年にはじまっていた経済力の後退が不吉にも尖锐化しはじめた。一九三〇年二月、失業者数は三五〇万人に達する。九月総選挙で、ナチス党と共産党は大躍進し、こうした政治状況に不信をもつた外国からは、信用返還請求の声が一気に高まった。その結果、失業と窮乏はさらに悪化する。一九三一年、すべてのドイツ金融機関へ、人々がパニック状態で殺到しはじめ、七月には一時的にあらゆる金融機関が閉鎖に迫りこまれた。失業者は増加の一途をたどり、三一年一月に四九〇万人、三二年一月には六百万人を超え、就業人口の実に三分の一が失業するという最悪の事態に至つたのであつた。ヒトラーは反ユダヤ主義の立場から無数の集会において、憎悪に満ちた長広舌をふるい、失業者にはパンを、農民には低地代を、有産階級には共産主義からの保護をと訴え、窮乏に脅かされた大衆の救済への期待を高めた。一九三二年七月の総選挙でのナチ党大勝利、そして三三年一月三〇日のヒトラー首相誕生に至る背景に、世界全体に進行していた経済恐慌の波及を、考えないわけにはいかないだろう。

そして、恐慌によつてヨーロッパから帰国せざるを得なかつたアメリカ人たちとは逆に、ドイツからヨーロッパの各国に大量の反ナチス亡命者たちが流出していったのである。ヤン・ハンスが明快に指摘するように、ファシズムの権力の移譲の時点——正確には、ヒトラーの首相指名と国会炎上事件との間の時期にドイツを去つた知識人の数は、意外にもきわめて少ない。本論に関わる人物で言えば、明確に政治的理由から亡命したハインリヒ・マン（二月二一日）を除くと、トーマス・マン、エルンスト・トラウ、ジョージ・グロスなどは偶然講演旅行のために国外に滞在し、またヨーゼフ・ロートは、前々から計画していた国外旅行の途について、そのままついに二度とドイツに帰ることなく終つたのである。

一九三三年二月二七日、国会議事堂が放火され、共産党員が逮捕されるという事件がおこつた。この夜のうち

にテロと迫害とが始まり、いわばこの事件を口実として、ナチスは反対派への弾圧をいちだんと露骨に加えるようになった。実は、この放火そのものがゲーリング配下のベルリン突撃隊の少数精鋭分子によつて、故意になされたとの説もあるが、その確証はない。しかしいづれにせよ、ナチスはこの日以降、驚くべき速さをもつて恐嚇政治を実践していったのであつた。それまではナチス突撃隊の、いわば非合法的ないやがらせだつた行為が、今や大統領令による国家擁護の合法的措置となり、家宅搜索、財産差押え、連行逮捕が思いのままにできるようなつた。そして、先にも述べた通り、この国会炎上事件が、多数の政治的・文学的インテリを亡命に踏み切らすシグナルとなつたのである。実際、共産黨員や左翼ジャーナリストたちの幾人もが、事件後数日の間に逮捕され、強制収容所で拘留、虐殺されていった。ベルリン・ダダの詩人W・メーリングは、二月二六日の事件前夜、外省に勤務していた友人からパリに行くようにという謎めいた忠告を受け、二七日朝、間一髪のところまでベルリンを離れ、逮捕を免れた。メーリングはベルリンを発つ前、雑誌『ヴェルトビューネ(世界舞台)』の編集主幹カール・フォン・オシエツキーにも知らせたが、彼は「パリによろしくな」とだけ言つてドイツを離れようと思はず、二八日逮捕されたといふ。

こうした不安と恐怖のなかから、文化人の間に一種のパニック状態が広がつて、二八日から、大量の出国者が相次いだ。当局側はこれに対抗して、国境駅に手配リストを持った「補助警察」(SA)に配して、厳しい検閲をしいた。(同じく本論に関連する人物で言えば)二八日にはヨハネス・R・ベツヒャー、ベルト・プレヒト、ヴィリー・ミュンツェンベルグが、そして三月中旬にレオポルト・シュヴァルツシルト、クラウス・マン、ヴァルター・ベンヤミン、アーノルト・ツヴァイクなどを含む七十余名の作家たちが亡命している。ツヴァイクは当時の緊迫した状況を次のように回想している。

一週間後、国会議事堂の炎上によつてあらゆる様相が一変してしまつた。今やおそらくドイツでの権力闘争へ進む政治体制の性格、決断があらわになつた。わたしがドイツを去らねばならないことも、今や間違いない

ものとなった。キーペンホイアーとわたしは会社で会った。彼は仕事の関係解消の協定を提案した。長編『ドウ・フリエント帰る』に支払われるはずの印税報酬を諦めるかわりに、同社から刊行した自著の長短編、エッセイ、戯曲のすべての出版権を返却してもらった。それは悲しい会議だった。八年来、出版人と作家とを結びつけてきた協力関係に終止符を打つものだった……。ベルリンでは迫害、逮捕、拷問、殺害の噂がゲネラル・パーヘ・シュトラーセやコロンビアハウスに飛び交っていた……。三月十四日、わたしはベルリンを離れた。

(平田達治氏引用訳)

ナチス政権は、「民族の身体の徹底した道徳的な消毒作業を実施する」(三月二三日のヒトラー政府声明)と宣言して、あらゆる文化領域から、ナチス・イデオロギーに同調しない者たちの抹殺をはかった。三月中旬、芸術アカデミー文学部門の会員全員に対し、ナチス政府に忠誠を誓ってアカデミーに留まるか否かの文書が送付され、「ヤー(はい)」と答えたにもかかわらず一方的に除名された者も含め、約半数が五月までに追放された。この部門の委員長を務めていたハインリヒ・マンは、すでに二月十五日に辞職に追いこまれ、先に見たようにその一週間後には、亡命を余儀なくされている。

そして、ナチスによる文学弾圧と言語統制を象徴するのが、五月十日ドイツ各地の大学でおこなわれた「焚書」事件であろう。ベルリンでは、褐色のナチ突撃隊の制服を着た学生たちが、古代ゲルマンの祝祭を思わせる松明を掲げて行進し、オペラ広場へと向った。夜十一時、巨大な薪の山に火がつけられ、「非ドイツ的」とされた二万五千冊の図書が、ナチスの学生幹部の演説に続いて火の中に投ぜられた。薪の山は十二あり、それぞれが哲学、長編小説、ドラマ等、分野別に割り当てられていたという。五月十六日付『ドイツ書籍業組合ニュース』紙上には、「一掃さるべき書物の第一回公式ブラックリスト」が掲載され、国内外計一三一名の文学者たちの名前が列挙されている。

ナチスの弾圧的政策は、この後一段と苛烈さを増して他の政党を解散に追いこみ、七月十四日にはついに一党

独裁体制を獲得した。この頃までには、反ナチスの政治家や文化人で、運よく逮捕をまぬがれた者の多くは、すでにドイツ国外で亡命生活に入っていたが、ナチスはこれらの人々に追い討ちをかけるように、八月二三日第一回国籍剥奪リストを発表した。三三年から三八年末までに出されたリストは実に八四にのぼり、計五千人以上が国籍を剥奪された<sup>(14)</sup>。さらに三九年一月〜四月には三千人が追加されている。またヤン・ハンスが指摘するよう<sup>(15)</sup>に、このリストの中で作家が占める割合が非常に高いということは、ナチスが、文学というジャンルがもつ潜在的な力を、いかに恐れていたかということの証拠にもなる。

こうした歴史の激動のなか、ナチス政権下のドイツからの亡命者の総数は、四十万とも五十万人ともいわれる（うち二千人が文学関係者）。だが現代から振り返りかえって不思議に感じられるのは、これほど危機的な状況の中で国外脱出したにもかかわらず、亡命者の多くが、この亡命がきわめて短い期間だと考えていた点である。しかし後に詳述するように、その覚悟なき出発が亡命者たちに、思いもしなかった苦難を強いるようになっていった。

一九三三年秋にもなお、グスタフ・レーグラは息子に宛てて、「これは休暇だ……亡霊はたぶんほどなくして消え去る」と書き、同時期にアルフレート・デーブリンも「これはちよつと遠出をしているだけだ」と信じていた。クラウス・マンも自伝の中で、「数週間やおそらく数か月も経てば、ドイツ人は本心に返るにちがいがなかった」と、再三繰り返し返しているが、それは当時市民的作家だけが信奉していた自己欺瞞というわけではなかった。一九三四年六月になつても、ヘルマン・ブデイスラウスキーは、ナチ政権は「限られた一時期のみしか続かない。いずれにせよ、数年はもたない」との予測を立てている。（ヤン・ハンス、山本尤氏訳<sup>(16)</sup>）

亡命初期には、このようにファシズム政権が短時間で終わるというテーゼは、さまざまな政治的立場の異なる作家から、繰り返し主張されていたという。そうした評価は、彼らの亡命国の選択に如実に現われていた。亡命者

たちは「できるだけ国境の近くに／帰還の日を待ちつつ／国境の彼方のどんな小さな変化も見逃さず」に、住みついた（ブレヒト『亡命者という名称について』<sup>(註)</sup>）。つまりできるだけ祖国に近くあって、「迫りくるナチ政体の崩壊」に直接の影響を与えたいという理由から、チェコスロバキア、オランダ、フランスが中心の亡命国として選択されたのであった。

中でも特にオランダは、ドイツ亡命作家にとつて、かけがえのない国となった<sup>(註)</sup>。地理的条件に加え、言語的にも文化的にもドイツに似るオランダには、一九三八年までに約三万人とも四万人とも言われる亡命者たちが流入している。オランダでは、プロテスタント系市民政党ARPの党首ヘンドリック・コレインの政府が、他国のように外国人の入国規制や就業制限をおこなわなかったことが、亡命者たちにとつて幸いした。しかしそれ以上にオランダが魅力的であったのは、同じドイツ語圏として、ドイツ語による亡命者たちの出版活動を寛大に引き受けてくれた出版人が存在したからであった。それはオランダに留まった亡命作家やジャーナリストが五十人程度だったのに対し、オランダで著作を出版し、雑誌に寄稿した者が、三百五十人にのぼることからも判断できよう。平田達治氏が詳細に論じるように、オランダでは、ド・ランゲ書店およびクヴェーリードー書店という両社が、ヒトラー政権成立直後ドイツ亡命出版部門を創設（一九三三年四～五月）して、ドイツに占領される一九四〇年まで、「亡命文学」を全面的にバック・アップしたのである。クヴェーリードー書店は、ベルリンの代表的出版社キーペンホイアー書店のユダヤ人支配人ラツンホフを迎え、ハインリッヒ・マン、アンナ・ゼガース、トラウ、ツヴァイクなど名だたる亡命作家たちの出版を手がける一方、クラウス・マンが主宰した反ナチズムの雑誌『ザムルング（結集）』を刊行したことも知られる。一方ド・ランゲ書店は、ヨーゼフ・ロートを筆頭とする主にオーストリア亡命作家を援護し、傾向こそ（キーペンホイアーに比すれば）やや保守的ではあったが、作品完成前に稿料を月払いするという気前の良さが、貧窮にあえぐ亡命作家たちにとつて、大きな力となった。それだけに、三五年の夏、事業半ばにして謎の自殺で世を去るヘラールト・ド・ランゲと、四〇年五月、ドイツのオランダ侵攻の後、密告によってゲシュタポに逮捕され、アウシュヴィッツでガス室の犠牲となったエマヌエル・ク

ヴェーリードーの、両出版人の痛ましい最期を知る時、私たちは言葉を失わざるを得ないのである。

さて、オランダと同じくドイツ語圏の近隣国でありながら、スイスは、ドイツ亡命者たちに正反対の態度をとった。<sup>⑨</sup>山口知三氏も指摘するように、日本からは「完全中立国」というポジティブな側面しか、とかく見えないのであるが、「中立」の大義名分の裏には、「全ヨーロッパのなかで、ずばぬけて最も厳しい」(H||A・ヴァルター)亡命者対策が存在したのだった。スイスがこのような非人道的ともいえる態度をとった理由には、「小国の中立」を守るための政治的保身策があっただけでなく、ドイツへの経済的依存度が高かったために世界恐慌のあおりを受けて不況が深刻化していたという事実(三六年失業者ピーク・十万人)や、ナチスに同調する小市民層の排他的意識、第三帝国による経済制裁や軍事介入への不安など、種々の複雑な要素が指摘されている。スイスには、チューリヒに有名なE・オブレヒト書店があったものの、スイス作家連盟(SSV)がドイツ亡命作家のスイス定住に強く反対し、トーマス・マンのようなごく少数の世界的作家にしか例外措置を認めなかった。よって三三年一年間だけでも、亡命者は二千人と少なく、一時的な避難通過国としては重要な役割を果たしたものの、大戦終了まで留まった亡命作家はわずか十八名であった。スイスという国がドイツ語圏であり、亡命作家たちがその文学市場に参入できる可能性があったからこそ、彼らは忌避されたのであった。ドイツの名門出版社・フィッシュャー社のチューリヒ移転計画が阻止されたのも、それと同じ理由によるものである。

それではドイツの隣国であり、オランダ以上に大量の亡命者たちを受け入れたフランスは、特にパリは、いかなる亡命地だったのであろうか――。

### 3 ドイツ人亡命者たちのパリ

「本日パリは晴天なり」と題する自伝の中で、フレッド・ウルマンは次のように書いている。

私がパリを選択したのは、当然のことだった。そこには、亡命知識人や芸術家たちの多くが来ていた。(…一八三〇年以來、フランスは、自由なる精神をもつドイツ人たちにとってはつねに、政治的および宗教的自由の中心地であり、ハイネの第二の祖国であった。(…)) フランス国境は大きく開かれていたので、私は躊躇しなかつた。(拙訳)

またドイツ共産党幹部にして、フランスにおける反ナチス運動の急先鋒となったヴィリー・ミュンツェンベルク(二月二八日亡命)は、「焚書事件」の直後、一九三三年五月十五日に、「パリは移民の都と化した。毎日数百人もが到着している。みんな、ここで再会しているのだ」と、記している。

一九三三年三月以來、十月までに、フランスにはすでに三万人の亡命者が流入した。三九年までの亡命者総数は六万五千人を超えると推定されている。多くの亡命者がフランスを選択した理由としては、これらの証言から窺えるように、三三年のフランス国境通過が容易であつたこと、歴史的にパリが亡命者を受け入れてきたという名声、そしてまた英語より、フランス語のできる(学者系の)知識人たちが多かつたという事実などが挙げられている。そしてなによりも、フランスは文字通りドイツの隣国であり、前節ですで見たとように、ナチス政権が短命と考えていた亡命者たちにとっては一時の避難地として最適と思われたのである。

亡命初期の時代、パリは「自由の都」として、かなり重要な役割を果していた。一九三三年春、パリには早速、亡命者たちを保護する数々の援護団体がつくられている。「ドイツ人難民協会」「農民労働者同盟」「亡命ユダヤ人協会」など、偶然か(?)その多くが八区に集中していたといわれるが、最大の組織は、ロベール・ド・ロスチャイルドが主宰し、十二区に創設した「ドイツ人難民救済委員会」である。これは半官半民で、パリ・ユダヤ人協会にも近い組織であり、一九三三年から三九年まで一万四千五百人もの、女性や子供を含む一般難民を受け入れている。

また一九三三年から四五年まで、パリでは百三十以上のドイツ(およびオーストリア)系亡命雑誌が発行さ

れた。先にオランダの例に見たように、実質的な言論の場を剝奪された亡命者たちにとって、亡命雑誌は、亡命地以上に重要な意味をもっていた。それは、最後に残された自己表現の場であり、祖国へのメッセージであり、反ナチズムの活動の場であり、また亡命者同士の意見交換や交流をはかる、かけがえない場であった。現在ドイツ亡命文学の最も代表的な研究者であるハンス・ヴァルターは、「亡命雑誌」の意味について、次のように書いている。

それは、政治的グループの分裂と個々人の孤絶に抵抗する当時ほとんど唯一のふさわしい手段であった。亡命雑誌は、政治的、物質的諸関連から余儀なくされた空間的な距離を埋めることができた。亡命雑誌は、外に向かつてほとんどなにもできなかったが、亡命内部においてはかなりの効果をもって、世論を守り、世論を再興することに成功した。「それは」平穏な時代におけるよりはるかに強く、自己了解と意志形成の道具であった。(……)そして安定化の要素として、精神的な鏡かすがいの役目を果たした。

(ヴァルター『亡命雑誌』、山本訳)

同時期、世界各地で出されたドイツからの亡命定期刊行物は四百種にのぼるといふ統計があるので、実にその三分の一がパリで発行されていたわけである。もともと四百種のうちの半数は一年で、さらには三割は二年か三年で廃刊の憂き目にあつてゐるというから、「精神的な鏡」とはいえ、その厳しい出版状況は推しはかれよう。

ナチ政権は、ドイツ国内に存在していたリベラルな新聞雑誌の徹底的統制を巧みにおこなつた。先にも見たカール・フォン・オシエツキーを主幹とする『ヴェルトビューネ(世界舞台)』のように、一方的に刊行禁止したものの、『ベルリナー・ターゲブラット(ベルリン日報)』や『フランクフルター・ツァイトウング(フランクフルト新聞)』のように、ナチズムの看板として強制的に変身させたもの。そしてまた『リテラリーシュ・ヴェルト(文学世界)』のように、自主的廃刊に追いこんだ例もある。

これに対抗するかたちで、世界各地に雑誌自体が、次々と「亡命」し、また各地で新たな定期刊行物が誕生していったのである。一方的に廃刊された『世界舞台』は、三三年四月十四日、『デイ・ノイエ・ヴェルトビューネ（新世界舞台）』としてプラハで刊行された。次いで九月には、クラウス・マンによる『ザムルング（結集）』がアムステルダムにて発刊、同時期プラハでは、ヴィーラント・ヘルツフェルデを中心とする共産党系月刊誌『ノイエ・ドイチェ・ブレター（新ドイツ雑誌）』が刊行され、これらは亡命雑誌の中でも重要な地位を占めていく。パリでは、これに先立つ七月一日、レオポルト・シュヴァルツシルドによって『ダス・ノイエ・ターゲブーフ（新日記）』が発刊された。これもまた、ベルリンの代表的週刊誌であった『ダス・ターゲブーフ（日記）』の亡命版であり、一九三七年には一万六千部の発行部数を誇って、同じく三三年に創刊された日刊紙『パリザー・ターゲブラッド（パリ日報）』（一九三六年『パリザー・ターゲツァイトウング』『パリ日刊新聞』と改名。発行部数一万四千）と並んで、亡命者たちの間に幅広い支持を集めた有力紙であった。さらに一九三八年六月には、先にプラハで創刊された『新世界舞台』がナチスのチェコ侵攻のためパリに移転し、左翼系亡命雑誌の地位を守ると共に、ハインリッヒ・マン、クラウス・マン、ペンヤミン、ブレヒトなど多くの文学者の作品を掲載した（一九三九年八月廃刊）。

その他パリでは、社会民主党系、労組系、共産党系など、直接的に政治組織発行の新聞雑誌が、多数誕生した。そして第三帝国からの難民のうち、十〜十五%を占めるといわれる政治亡命者たちの中で、最も精力的な活動を展開したのが、ドイツ共産党幹部であり、コミンテルンの工作員、第一回国籍剝奪者リストの筆頭でもあったヴィリー・ミュンツェンベルク（二八八九—一九四〇）であろう。彼は、一九三三年一区モンドトゥール通りにヘナチ政権犠牲者救済国際委員会の事務局を構えた。ミュンツェンベルクは、反ファシスト組織をコミュニニスト以外の支援団体と結びつける形で設置し、それでいて組織の実質的な支配は共産党支部が手中に収める、という実に巧妙な政治工作を展開していった。表向きは慈善活動をおこなうとしていたこの「ヘナチ政権犠牲者救済国際委員会」が、実はその中心組織だったのである。彼は一方で、〈往来社〉という出版社を創立し、三九年までに独・

仏の他十ヶ国語で五六点もの政治宣伝資料の出版を手がけた。中でも特に有名なのは、一九三三年八月一日に刊行された『国会議事堂炎上とヒトラーの恐怖政治についての褐色の書』（二巻、三三・三四年）である。これは二月二七日の国会議事堂炎上の真犯人は共産党ではなく、ナチスであると告発する書であり、『ゲーテ、ヘルマン、そしてドロテア（レクラム文庫、第五五巻）』という全く偽の表紙を故意にかけて、全世界に向けて出版された。一説に三ヶ国語、六十万部ともいわれる伝説的な告発書である。そしてこの本が大きな契機となって、九月下旬にロンドンで国会炎上事件についての一種の国際裁判がおこなわれて、世界中の耳目をひきつけ、反ナチス亡命者たちの存在をアピールするのに大いに役立ったのであった。

パリが、オランダとは違うかたちで、亡命者たちの新たな出版地の役割を果たしたのは、以上見てきた通りであるが、亡命雑誌の他に、出版に関係する点で特筆すべきなのは、一九三四年五月、例の「禁書事件」のちようど一年後に、アラゴ通り六四番地に設立された「ドイツ自由図書館」であろう。これはルドルフ・レーオンハルトが亡命直後にパリで再組織したヘドイツ著作家擁護連盟（SDS）が、創設した図書館である。ハイブリット・マン、ロマン・ロラン、アンドレ・ジッドなどの協力のもと、一万五千冊あまりのナチによる略奪本および焚書対象本を収集し、独仏語のパンフレットを発行した。ここではSDSの展覧会や、一九三五年開校したヘドイツ自由大学への定期講演会なども催され、一九三四年から三八年のパリにおける、亡命ドイツ人文化活動の拠点となったのである。

こうしたドイツ亡命者たちのパリにおける政治および文化活動は、フランス国内自体における反ファシズム運動と、当然のことながら軌を一にしている。一九三〇年代フランスの文学と政治については、H・R・ロトマンの名著『セーヌ左岸』をはじめ、すでに多くの研究書があるため、本論での詳述は避けたいと思うが、ドイツ亡命者たちとの関連で改めて思い出しておきたいのは、フランス人作家たちが積極的に関わった、いくつかの反ファシズム国際会議であろう。

一九三二年八月、アムステルダムで開かれた国際反戦会議は、ロマン・ロラン、アンリ・バルビュスの両者の呼びかけで開かれたもので、ヒトラー政権成立をはさんで、三三年六月パリ（於音楽ホール）のサル・ブレイエル）での第二回会議と合わせ、（アムステルダム）ブレイエルと呼ばれる。ロランらの反ファシズムの呼びかけに応えた各国の知識人は多数にのぼり、ドス・パソス、マルコム・カウリー、バートランド・ラッセル、アンドレ・ジッド、ジャン・ゲーノ、ロジェ・カイヨワ、アンドレ・ブルトンなど、著名人も枚挙に暇がない。ドイツ人亡命者の中ではハインリヒ・マンや、ミュンツェンベルクが参加し、ロランはミュンツェンベルクを「革命の中の偉大な芸術家」と評し、アムステルダム会議における彼の「燃えあがる炎の如き雄弁」について語っている。社会主義インターナショナルは、ロラン・バルビュスのイニシアティブの形をとりながら、実はコミュニストが主導したとして、この会議の政治性を正面切つて非難したが、フランスの知識人たちに政治の季節が訪れたのを、これほどはつきりと示した事件はないだろう。その後、この会議を母体として、反戦・反ファシズム闘争委員会という単一の組織もパリに設置され、その事務局にはバルビュスとミュンツェンベルクの名が見られた。

さらに、一九三四年八月十七日から九月一日まで、モスクワで開かれた第一回ソヴィエト連邦作家同盟大会には、世界中から数十名の外国人作家たちが招かれて参加した。後世から見るとスターリニズム体制確立の第一歩とも評されるこの会議の、歴史的意味は今ほさておき、山口知三氏の解釈を借りて、この会議を契機にドイツ人亡命者たちの内に認識され始めた、亡命者の立場と活動の限界について見ておきたい。

このモスクワ大会に参加した外国人たちの中で、とりわけ注目を集めたのは、アンドレ・マルローを中心とするフランスの文学者たちと、ヨーロッパ各地から集まってきたドイツ亡命文学者の一団であった。そこにはモスクワを亡命先として選んだヨハネス・R・ベツヒャーをはじめとする共産党作家の他、プラハで亡命雑誌『ノイエ・ドイチュェ・ブレッター』（新ドイツ雑誌）を出していたオスカール・マリリア・グラフとヴィーラント・ヘルツフェルデ、あるいはエルンスト・トラウ、グスタフ・レーグラーやクラウス・マンの姿も見られた。前月には、オーストリア首相ドルフスがナチスのテロルに倒れ、この大会の開かれた八月に入るとドイツではヒン

デンブルク大統領の死にともなうて、ヒトラーは名実ともに独裁者になっていった時期である。反ファシズム陣営の期待は、ひとえにソ連とフランス人民戦線勢力との緊密な提携に寄せられていた。モスクワ会議は、開催に先立って革命作家・芸術家協会から祝福を受けているが、協会の次のようなスローガンは、この会議の意図とソビエト連邦の真意を明確に示しているといえる。

革命的プロレタリアの傍らにあつてフランスの作家・芸術家が広大な単一の戦線を築くために  
フランスにおけるソヴェト文学と国際的革文学の普及のために

唯物弁証法の旗の下、マルクス・レーニン・スターリンの旗の下に国際社会主義文化を創造するために

(天野恒雄訳)

アンドレ・マルローやルイ・アラゴンやポール・ニザンら、フランス代表団の発言がとりわけ尊重されたのは、まさにそのためであつた。そして苦しい亡命生活のなかから、はるばるモスクワまでやってきたドイツ亡命文学者たちの胸を満たしていたのは、今こそソ連に頼むほかはないという熱烈な期待と切ない願いであつた。しかし実際にこの会議に参加したグラーフの手記によると、当時のソ連にとっては、フランスこそ当にできる友人であり、したがってフランスから馳せ参じた左翼的文学者たちは、できるかぎり歓迎せねばならぬ賓客であつたのに対して、ドイツの亡命文学者たちは、しよせん「陪席的な存在」にすぎなかつたという。「ドイツは、ここではお呼びではないのだ。われわれは、ただくつついてまわっているだけなのだ」というグラーフの自嘲的な言葉は、亡命者という存在が、国外にあつて決して英雄ではないという冷徹たる事実と、一九三〇年代反ファシズム国際運動の裏にある複雑な政治的思惑とを、今日の私たちにもひしひしと感じさせるのである。

一九三五年六月二十一日から一週間、パリにて「文化擁護のための国際作家会議」が開催された。これは一九

三〇年代に政治活動に参加した作家たちにとって、いわば国際的連帯活動の頂点をなす集会であり、会議の組織には「左岸の知識人グループの最良の人々」が動員され、もちろんハインリッヒ・マン、ベツヒャー、プレヒト等ドイツ亡命文学者たちも多数参加し、演壇から発言している。会議の詳細な進行状況は、H・R・ロトマン『セーヌ左岸』の記述に譲りたいと思うが、一般には、翌一九三六年フランス人民戦線内閣成立に向けての重要な座標点とされるこの三十年代前半が、山口氏も指摘する通り、実は亡命作家たちにとって、一つの深刻な試練の季節でもあったことに、本論では再び注目したい。これほど反ファシズム運動が高まりを見せていった国際都市パリは、ドイツ亡命者たちにとって、なぜ真の「避難地」になり得なかつたのであろうか。

#### 4 窮迫と疎外

先に、反ファシズム・センターの事実上の「場所」は、亡命地ではなく、亡命雑誌そのものであるということを描いたが、パリにて「文化擁護のための国際作家会議」が華々しく開催された直後、一九三五年八月、雑誌『ザムルング(結集)』(於アムステルダム)と、『ノイエ・ドイチェ・プレッター(新ドイツ雑誌)』(於プラハ)が、相次いで廃刊のやむなきに至った。経済状態の窮迫が主な原因であつたが、それにしても亡命者たちにとって二年弱でこの二大雑誌が廃刊となつた痛手は大きかつた。そして『ザムルング』を主宰したクラウス・マンが同年暮に、苦々しく書き記しているように、「ヒトラーは依然として倒れなかつた」のである。

確かに亡命者の大方の予想に反して、ヒトラー政権は長期化し、ますます強大になつていった。三五年一月、第一次大戦終了以来国際連盟の管理下にあつたザール地方で、フランス併合か、ドイツ帰属かの可否を決める人民投票がおこなわれ、実に住民の九〇・八%がドイツ帝国への編入に賛成するという、予想外の事態に至つた。

「ザール闘争」に特別な意味を見出し、これを主題に作品を書いた亡命作家たちは完全なる敗北を喫し、文学市場を失つただけでなく、反ファシズム啓蒙文学の主要な中継地も失うことになつた。というのもそれまで反ファ

シズム文学の大部分は、ザールを經由して合法的に第三帝国へ運ばれていたからである。一方ドイツ国内でも反対派の地下活動への弾圧が強加され、細々ながら成立可能であった、亡命者たちと国内に残る反体制活動家たちとの連携が、急速に断ち切られていった。先にあげたプラハの『ノイエ・ドイチェ・ブレッター』の廃刊の理由のひとつにも、同誌の有力な支柱であったベルリンの非合法グループが、三五年夏にゲシュタポによって壊滅させられたことが、指摘されている。同じく一九三五年三月、ドイツは徴兵制を施行、六月、英独海軍協定が締結され、大國の対ドイツ宥和政策が次第に明らかになる。九月にはニュルンベルク法が成立し、ついにユダヤ人迫害が合法化された。

こうした厳しい状況の中から、パリでは「ドイツ人民戦線」が、いわば大同団結への最後の試みとして急速に形造られていく。一九三五年九月二六日、ハインリヒ・マンを議長とし、共産党代表ミュンツェンベルク、市民派代表レオポルト・シュヴァルツシルト（『ダス・ノイエ・ターゲブーフ』編集長）などを中心として第一回会合が開かれるが、この準備委員会は、会場所（オテル・ルテティア）の名を取って「ルテティア・サークル」と呼ばれている。この人民戦線は、ミュンツェンベルクを中心とした共産党系亡命者が、社会民主党系その他に働きかけて根まわし工作をおこない、結果したものともいわれているが、戦後の東西イデオロギーに絡んだ様々な批判や評価はともかく、この企てが、主義の違いをこえて局面を打開したいというパリ在住の亡命者たちの支持を得たことは確かであろう。三五年十二月ルテティア・サークルは、「ドイツ国民への共同宣言」（五二名署名）を發表、翌年二月二日「ドイツ反ファシズム人民統一戦線」第一回大会がおこなわれあらゆる政党やグループの百十八名の代表が宣言文「すべての人々に」を、起草した。そして同六月九日には、ハインリヒ・マンを議長にドイツ人民戦線創設準備委員会が設立されるまでにこぎつけるのである。

ところが翌三七年夏には、この組織は、事実上破綻していたといわれる。理由はさまざまにあつた。まず二大労働者政党の行動に統一性がなく、しかも結局は共産党との協力の意志がなかつたということ。三六年に始まつた一連のモスクワ裁判と肅清の嵐が決定的な影響を与えた。三六年末にシュヴァルツシルトは『一つの経験から

の教訓』という文章で次のように述べている。「……古くからあるグループを加えることで、それぞれが単独でいるよりも多くのことができるなんて考えは、幻想であることがはっきりした。足し算をしても、もとの個々の部分より多くはならず、小さくなつてしまつた。」

その上、山口氏が正しく指摘するように、「ドイツ人民戦線運動」は、あくまでも「亡命者たちの運動」であつて、ドイツ国内の人民とは切り離された、「人民不在の人民戦線」であつたことを、確認しなければならぬ。その点では必要に応じて大衆デモやストライキを組織し、短期間とはいえ政権まで握つたフランス人民戦線や、約三年間、敗北に終つたとはいへファシズム政権との内戦を戦い抜いたスペイン人民戦線とは、根本的に性格を異にしていたのである。

一九三五年前後（亡命文学研究によつて称される「亡命第二期」）の、パリにおけるドイツ亡命者たちを取り巻いていた深刻な政治状況と「分極化」の経緯は以上の通りであるが、次に、ある意味ではより深刻な側面——つまり予想外に「亡命」という状態が長期化したために、各々の亡命者たちの中に生じてきた精神的荒廃の様相について、語らねばならない。というのも、そもそも亡命地パリにおいて、彼らは決して幸福ではなかつたからである。それには、フランス国内自体の事情が微妙にからみ合つてゐる。

すでに述べたとおりフランスでは、ウォール街の影響を受けて、一九三一年末より不況が深刻化し始めた。フランス政府は、一九二〇年代にイタリアおよびポーランドからの炭坑労働者をはじめ、積極的に移民労働者を受け入れていたため、その他大量に「祖国亡命」してきたアメリカ人も含め、一九三二年には二九〇万人という史上最高の外国人口を記録している。イール・ド・フランスでは六十万、実に人口の九・二％に達した（イタリア人三十％、ポーランド人十九％、マグレフ人十％）。しかし不況のあおりをまともに受けて、アメリカ人をはじめとする外国人たちは、この年を境にして、パリから激減していく。三三年のヒトラー政権成立に伴い、三万人ものドイツ亡命者が流入した翌年、フランス政府は外国人対策を硬化させ、まず十一ヶ月以上の滞在許可書を発

行停止とした。さらに三五年には、移民労働者に対し、特殊技能を有することを証明する書類を所持するよう義務付ける一方、十月には滞在許可書を所持しない外国人を強制退去させることを法令化したのである。

祖国の近隣の自由な都市に、「一時避難」をするつもりでパリに來た多くの亡命者たちにとつて、これは深刻な問題であつた。国籍剝奪という、一見亡命者たちの「勲章」のように見えた措置も、現実のパスポート問題と絡んでくると深刻になる。ブレヒトは『逃亡者との対話』(一九四〇年/四一年)の中で、皮肉をこめてこう語っている。

パスポートは人間の最も高貴な部分である。人間のようにそう簡単に出来上らない。人間はいたる所で、易々と、さしたる分別なしに出来上るが、パスポートはそうはゆかない。人間はどんなにまでも認められないことがあるが、パスポートの方は、まともなものなら、ちゃんと認められる。(山本訳)

またたとえパスポートがあつたにせよ、フランスでの滞在許可書の申請は別にしなければならず、(現代でもパリに留学したことがある者ならば、ある程度想像がつくように)これが不条理なまでの努力を、亡命者たちに強いるものだった。ここに当時の証言を一つ挙げよう。

私は、皆が「涙の役所」と呼んでいるパリ警視庁に、何度も足を運んだ。私が指定された時間きっかりに着いた時には、きまつて自分の番など回つてこない。朝十時に來いと言われた時には、大抵七時には到着するようにしたが、それでも、すでに百人もの人たちが待っているという有様で、これの繰り返しだった。時に役人は出頭者のうちの何人かしか相手にしない。その上遅刻はするは、何時間も他の役人と無駄話はするは、昼食やカフェに出掛けてしまうはで、ようやく仕事を再開した時には、まもなく終業時間という態たらくだった。そして何ヶ月もの時間をこんなことに費した挙句、役人は大声でただ一言「君のへ受取証」〔滞在許可書を受領

するために発行される証明書」は期限切れだ」と私に言ったのである。私が毎日毎日いかに待ちぼうけを食ったことかと訴えると、奴は、自分がどう働こうが文句を付けられる覚えはないと怒鳴り始めた……。こうして何度も繰り返し、私は「受領証」を取り上げられ、強制退去を命ぜられる恐れのある青紙を渡された。従つてこの退去命令書を、新しい「受領証」に代えようと思うなら、また何週間も、毎日警察に行かねばならなかつたのである。(拙訳)

こうした官憲との問題の他に、亡命者たちを苦境に追いやったのは、彼らの非常に厳しい経済状況だった。現在のフランス側の研究によれば、亡命者たちの多くはレ・アルあたりの場末に住み、快適からはほど遠いホテル暮らしを続けていたという。フランス当局は、滞在許可書のために、十分な生活資金を持っているという証明を求めたので、「四十人の老いた亡命者がたった一枚の千フラン札をこの目的のために使用し、警察署に出頭する者がこの札を手にして当局に提示し、済むと次の者に渡すという手を使っていた。ある日、これを受け取った警察署長がへこの札、どこかで見たことがあるぞ」と言った」という、笑うに笑えない回想も残っている。

また街の中での、一般フランス人の反応も冷たいものだったと彼らの多くが語っている。その最大の理由は、普仏戦争から第一次世界大戦へと至る、積年の怨恨にも似た一般感情にもとづくのであろうが、それに加え、第三帝国からの亡命者(ユダヤ人)という固定観念が、どの国にもあつて、一般ドイツ人(反ナチズム)亡命者を受け入れ難い空気が存在したことも否定できない。クラウス・マンは、こうした周囲の無理解について、「たいていの人々は我々をうさん臭そうに横目で見た。我々がドイツ人だったからではなく、我々がドイツを去つて来たからであつた。祖国を去るようなことはしないものとたいいていの人々は考えていた。まともな人間なら、誰が政権を握つていようと、祖国の味方をするものだ。合法的な権力に反対するものは、怪しい奴、文句の多い不平家だ……と」考えている——と口惜しげに記している。

一九三三年に始まったドイツ亡命者の総数は五十万（もしくは六十万）人、そのうち文化的職業に関わつていた者は五千五百人、その半数が作家、ジャーナリストだったとされている。反ファシズムを掲げて国外脱出したこれらの文学者たちの当初の信念は、（政治的立場によつて多少ニュアンスの差があるにせよ）クラウス・マンによつて書かれた次のような「プログラム」（ハンス）によつて代弁されるだろう。

一方で、全世界に向かつて第三帝国の危険性を警告し、この政体の眞の性格を知らしめ、同時にへもう一つの（へより良き）ドイツ、ひそかに抵抗している非合法的なドイツと接触を保ち、故国の抵抗運動に文学的材料を提供することが問題であつた。他方でまた、ドイツ精神とドイツ語の偉大な伝統、その母国において今や生きる場所のなくなった伝統の火を、異郷の地で燃やし続け、独自の創造的貢献によつてさらに大きく発展させることが大切であつた。（山本訳）

一九三〇年代前半の亡命地パリにおいて、ドイツ亡命作家たちは、この理念が現実に裏切られていく状況を身をもつて体験しなければならなかつた。その大きな背景として、すでに見てきたようなザール問題の敗北に伴うナチス・ドイツ国内の非合法グループとの断絶や、ドイツ人民戦線への失望などが存在したのは言うまでもない。しかし問題は、もつと複雑であつた。それは作家にとつて、「亡命」とは何を意味するのか——を今ここで再び問い直すことに他ならない。

オーストリア、オランダ、スイスなどへの亡命と違い、母国のみならず母国語からさえも断ち切られるフランスへの亡命は、作家にとつて、実は決定的なダメージを意味していた。国外脱出したために、ドイツでの既刊本の著作権をも喪失し、印税の送金も受け取れない事態に追い込まれた亡命者たちにとつて、わずかでも収入を得られる各国の亡命雑誌が次々と廃刊されたのは大きな痛手であつた。しかもフランスには、しよせんドイツ語で流通する文学市場は存在しなかつた。驚くことに一九三〇年代のフランスには、依然として文壇の中心をなす「文

学サロン」が厳然と存在していた。ポリニヤック家、ラ・ロシュフーコー家、ノアイユ家など貴族のパトロンたちをはじめ、ダニエル・アレヴィイのサロンなど、よそ者を受け入れない「家の中」(ロトマン)にこそ、正式な<sup>フオヤル</sup>会合の場所が存在していたのである。若い亡命者エルンスト・リーリッヒ・ノートは、回想録の中で、パリで人と知り合いになる場合にこうした文学サロンが果している役割の重大さと、閉鎖性を指摘している。またロトマンは、パリにおける亡命文学者たちについて次のように書いている。

ごくわずかな例外を別とすれば、亡命者たちは窮迫した生活を送っており、かれらの目にはパリの社会は閉鎖的なものと映った。別に金に困ってはいなかったヘミングウェイのような人間がフランス人の自宅に招かれることはあったが、亡命者の場合そんな機会はめつたになかった。かれらは作家として他の作家から受け入れられることはあつたし、政治的信条ゆえに亡命先のコミュニストから歓迎されるのが普通だった。しかし多くの場合こうした出会いはキャフエで行なわれるか、自宅に招かれるとしてもコーヒータイムだった。亡命作家同士が左岸のキャフエで会うと、話題は大体金か金がない話だった。(天野訳)

そしてさらにロトマンは、亡命作家に共通の課題——故国という根を断ち切られ、それでいて自分の選んだ国について何か書くほど、その国について深く知らないとき、何を書くのかという問題——について触れている。三十年代のドイツ亡命者たちには、(もう一つの)「へより良き」故国に向けて、書くべきことが確かにあつたはずだった。しかし時代と、亡命地とは、それを徐々に彼らから奪っていったのである。ある亡命作家は、「われわれは『パリの』街の中で震えながら、永遠の観光旅行者あるいは永遠の亡命者のいずれかの状態にとどまらざるを得ないのだ」と、深い悲しみをもって記している。こうした三十年代パリに在った外国人作家たちの姿ほど、「亡命」という特殊な異文化体験に内在する荒寥たる内面風景を、私たちに示している例は、他にあるまい。

## 5 亡命の末路

一九三八年三月十四日、ヒトラーはオーストリアを「ドイツ帝国の東部地域」<sup>オーストリア</sup>として併合した。亡命者たちの再亡命の波がうねり始める。一九三八年当時亡命者全体の八十%はすでにヨーロッパ大陸を離れていたのに対し、亡命作家や芸術家の大半は、まだ踏み止まっていたという。<sup>②</sup>しかし状況はさらに悪化するばかりであった。同年十月一日、ドイツ軍は、チェコ国境を越えて侵攻を開始し、反ファシズム亡命者たちの最も重要な亡命地の一つが、ここに消滅することになる。ドイツ国内では同時期、ユダヤ人強制国外退去措置が開始され、十一月にはユダヤ人を大虐殺した「水晶の夜」(九・十日)事件がおこった。この時期移民法の規定を緩和したイギリスには数ヶ月で七万人もの(主にチェコからの)人々が亡命した。

そして一九三九年八月二十三日、それまでの反ナチス・ドイツ亡命者たちの運動を根底から揺がす事態が発生した。ヒトラーのドイツとスターリンのソ連が手を結び、独ソ不可侵条約が調印されたのである。<sup>③</sup>トーマス・マンは、八月二十四日の日記にこう記している。

世界の混乱は大きい。なにしろ〈左翼〉という概念が今やいつさいの意味を失ってしまったのだ。左翼はなんといつても多かれ少なかれロシアを頼みにしてきたわけだが、そのロシアが今や敵側についてしまったのだ。社会主義的な色彩をおびた自由は、ロシアを頼りにできると信じてきたが、それは間違っていたのだ。(山口訳)

この作家の眼が、すでに二十世紀全体を見透していることに驚きを禁じ得ないのであるが、このような条約締結によって辛い立場に立たされたのは、ソ連に亡命していた人々だけではない。フランスでも事態は深刻であった。

一九三九年八月末から第二次大戦開戦（三九年九月）直後の時期にかけて、フランス当局は突然、ドイツ人亡命者に対して個別的逮捕や集団的強制収容の措置をとった。H II A・ヴァルターの詳細な検証によれば、その何よりの要因は、独・仏開戦という理由より、独ソ不可侵条約によってフランス国内に急速に高まった反共政策によるものだという。山口氏はこの辺の事情を次のように明快に説明している。

考えてみれば、これは当然のことであった。ただでさえドイツ人は今や敵国の人間として猜疑の目で見られる存在であつたうえに、共産黨員やその同調者がこれまでいかに反ナチス亡命者として振舞つてきたにしても、彼らが深いつながりをもっているソ連までもが今やナチス・ドイツの同盟国となつたのだから。彼らはフランスにとつては二重の意味で敵性人種と見なされたわけである。換言するなら、すくなくとも共産党系の反ナチス亡命者たちは、彼らの与り知らぬところで締結された独ソ不可侵条約によって、彼らの反ナチス性そのものの信憑性を奪われてしまい、反ナチス亡命者としてのアイデンティティーを喪失してしまつたのである。

その証拠に、この時期フランス当局に真先に逮捕された人々の多くは共産党亡命者であり、シュヴァルツシルトやミュンツェンベルクのように、明確に反共主義もしくは反スターリンの主張を掲げる雑誌を主宰していた亡命者は、逮捕どころか収容すら免れたのである。その反対に、前年プラハからパリに再移転した『ノイエ・ヴェルトビューネ』誌は、独ソ不可侵条約を厳しく批判した記事を掲載していたにもかかわらず、それまでの共産党との深い関係ゆえに、他の共産党系亡命雑誌と同じ扱いを受けて発行禁止となつてしまつた。また一九三三年以来、フランス在住亡命者たちの団結の場であり、活動の中心であつた「ドイツ著作家擁護連盟」や、「ドイツ自由図書館」などの組織も、共産党の強い影響下にあると見なされて、活動を禁止され、中心的活動家の多くが逮捕された。

このフランス当局の一連の措置が、現代史上の汚点と見られているのは、共産党系のみならず、高齢者を除く

全てのドイツ人亡命者に出頭が求められ、ドイツ人一万三千人、オーストリア人五千人と推定される。「一般の」亡命者たちもが、最低二週間から最高二ヶ月の強制収容所行きを命じられたからである。その上この収容所の有様は、基本的人権を全く無視した、実に劣悪極まるものであった。

一九三九年九月、第二次世界大戦勃発、一九四〇年四月、デンマークとノルウェーがドイツに侵攻され、フランスには、ヨーロッパ大陸に残っていた亡命作家の大半が逃げこんで、「さながら巨大な人間の吹き溜り」(ヤン・ハンス)と化した。五月十日、ドイツ軍はルクセンブルク、オランダ、ベルギー、フランスへ侵攻を始め、六月十四日、ついにパリは占領された。六月二十二日、コンピエーニュの森で独仏停戦協定が調印され、悪評高き第十九条によって、ヴィシー政府はナチスに指名された人物のすべてを「求めに応じて引き渡す」義務を負った。しかし近年ヴィシー政府の、むしろ積極的なユダヤ人迫害の実態が明らかにされ、戦後五十年を経て、ようやく昨年(一九九四年)、ミッテラン政権は過去の非を認めて、犠牲者を追悼する碑を建立している。フランスにおけるドイツ人亡命作家たちに、さらにふりかかってきた災厄に、占領の三ヶ月後(一九四〇年九月)に作成された「オットー・リスト」がある。これは占領軍とフランス出版業者組合との間に交された検閲協定であり、「政治的亡命者ないしユダヤ人作家の作品」を絶版にする目的をもっていた。その序文には「問題とされる本は、偽りの偏向した精神によって、フランスの世論を計画的に毒したものであり、とくにフランスから受けた歓待の恩を忘れ、破廉恥にも戦争を挑発し、そこから己れの利己的な利益を引きだそうと願う政治的亡命者ないしはユダヤ人作家の作品をいう」と書かれている。禁書の対象作家には、ハイネ、トーマス・マン、フロイト、ツヴァイクといったドイツ人のみならず、アラゴン、ドゴール、モーロワ、マルローといったフランス人作家から、シャガール、ミロといった画家、さらにはシェークスピア、ミルトン、ヴァージニア・ウルフなどのイギリス人まで入っていた。そのリストの最高期には、千種類以上の書物、重さにして二千二百四十三トンの書物が廃棄された。それはまさに、一九三三年にドイツで行なわれたあの焚書事件の再現ともいふべき状況であった。

一九四〇年以降ヴィシー政府の魔手は、書物どころかフランス在住全ドイツ人に及び、亡命者たちは文字通り、

生命からがヨーロッパから逃げまどうほかはなかつた。中立国スイスへ何とかもぐりこもうとした者、マルセイユから船で脱出しようとした者、ピレネー山脈を越えてスペイン、ポルトガルをめざし、そこから船に乗ろうとした者、あるいは一時期国内通過を認めたソビエト経由で日本—アメリカへと渡ろうとした者……その選択はさまざまであった。そしてその逃亡の途次で多くが生命を失なつていった。ヴィリー・ミュンツェンベルクは、収容先からスイスへの逃避行の途中、一九四〇年六月、首縊り自殺のかたちで発見された。一説にはスターリンの手先による他殺とも言われる謎の死であつた。ヴァルター・ベンヤミンは、ピレネー山脈を越える途中で、フランス側に引き渡すとのスペイン官憲の脅しを受けて、痛ましくも服毒自殺を選んだ。

ヨーロッパから幸運にも脱出し得た人々は、主にアメリカ、パレスチナ、メキシコ、ブラジル、オーストラリア、中国などに渡つていった。

中でもアメリカは最大の受容れ先であり、ハインリッヒ・マン、ブレヒト、シュヴァルツシルト、クラウス・マン、トーマス・マンをはじめ実に約七千六百人の知識人たちが亡命している。しかしアメリカは、ソ連とは逆に、ドイツ亡命文学の中心地とはならなかつた。その理由は「亡命を強いられた人々をヨーロッパから救い出すことで……新参者たちへのアメリカの世論の関心はたいしておしまひになつた」ことにある。古典的な移民国アメリカは「できるだけ速やかかつ完全なアメリカ化」を期待していた（シュテファン『亡命文学』）のである。亡命作家たちは、それでもある程度なじみのあるヨーロッパの気候風土を離れ、言語も生活習慣も全く異なるアメリカで、いよいよ創作を生む「根」を枯らされていった。すでに「亡命地パリ」の意味を再考したように、作家にとつて、亡命という体験が内面生活を徐々に蝕んでいく過程は悲惨の一言に尽きる。平田達治氏はアメリカにおける亡命者たちについて次のように述べている。

そもそも言葉というものは故郷での幼年時代の体験を通して、各人の自己形成の本質に深く関わっているもので、特に亡命生活にあつては単なるコミュニケーションの手段ではなく、民族の一員として自己のアイデン

テイティーを確認し、自己の原点に立ち帰るための唯一可能な媒体であった。トーマス・マンはアメリカへ亡命した時、アメリカ側の熱狂的な受け入れに感謝しつつも、常にドイツ語で語り合える仲間を求めつづけ、しばしば彼らに執筆中の作品を読んでもかせ、いつも「わが故郷・ドイツ語」の中に身を置こうとした。これはマンが公的にはアメリカ市民となりながらも、自由なドイツ精神、過去の優れたドイツ文化との絆を保持し続けようとした強い意志の表われに他ならない。(……)マンの長男クラウスが父とは違つて、アメリカ市民権を取得しえないまま、何回もアメリカ軍に志願し続けたのは、彼の小伝の著者U・ナウマンも指摘する通り、亡命先の大都市ニューヨークでのホテル暮らしの孤独に堪えかね、何か大きな共同体に完全に帰属したいとの切なる願望からであつた。「アウトサイダーでいることは、唯一堪えがたい屈辱である」と、彼は吐露してゐる。

祖国ドイツ文化の正統なる継承者であるという自負と、長期の亡命ゆえに喪失していくアイデンティティーの危機。その中から自殺という最期を選ぶ者も、少なくはなかつた。エルンスト・トラーは、すでに三六年頃にはアメリカに亡命していたが、大戦勃発直前、三九年五月ニューヨークのホテルで首を吊つて、苦難に満ちた生涯に自ら幕を下した。トラー自殺の報は、在パリ・オーストリア人に大きな衝撃を与え、作家ヨーゼフ・ロートは、この親友の死によるショックと極度の貧困の中で死に至つてゐる。またステファン・ツヴァイクは、四〇年七月、再婚してまもない妻ロッテを伴つてヨーロッパを離れ、アメリカ経由でブラジルに移り住んだが、自叙伝『昨日の世界』を書き上げたのち、一九四二年妻とともに服毒して、この世を去つていった。またアメリカに亡命以来、英語で著述する努力をし、アメリカ軍に入隊を志願してまで「アメリカ」化を自らに課したクラウス・マンは、戦後一九四九年五月、フランスのカンヌで、致死量の睡眠薬によつて自ら命を断つてゐる。ドイツ亡命以来十二年という歳月の帰着点は、余りに殺伐としたものであつた。甥クラウスをこよなく愛していた伯父ハインリッヒ・マンは、その訃報に接して、彼は「この時代によつて殺された」と語つたといふ。

## 6 「亡命文学」研究の経緯と現在

ヒトラー政権成立以来大戦終了時まで、ヨーロッパへ、そして全世界へと逃亡を余儀なくされた第三帝国亡命者、特に亡命作家たちの活動、作品やその生涯については、驚くことに実はつい最近までドイツ側からもフランス側からも、言及されることがほとんどなかった。ドイツ現代文学を代表する作家たちが、これほど数多く含まれていながら、全く沈黙の中に伏せられ故意に無視されてきた背景には、現代ヨーロッパ政治の縮図そのものともいえる事情が隠されている。山口氏の著書を借りて、まずはドイツ側の経緯を説明しておこう。

ナチス政体が崩壊し、一九四九年にドイツという国家が東西に分裂した後、西ドイツでは「国内亡命派」という概念が幅をきかせるようになった。それは「反ナチスの志操を心中に堅持しながらも国内に踏みとどまり、国民とともに筆舌に尽しがたい艱難辛苦に耐えて、自分たちこそが正統なドイツ文化の継承者であり、新しいドイツ再建の担い手なのであって、祖国と同胞を見捨てて他国に逃れ、優雅な亡命生活を送ってきた作家に、その気持などわかるものか」という主旨の、トーマス・マンを筆頭に含む「国外亡命者」たちに対する一連の批判キャンペーンであった。ドイツに残っていた人々の、「亡命者に対する後ろめたさを秘めているがゆえに屈折した反感や敬遠の感情」は、戦後、強まりこそすれ、弱まることはなかったのである。

それに加えて、東西ドイツ間の冷戦構造が関係してくる。というのも東ドイツは建国にあたり、モスクワに亡命した知識人たちを国家指導者にまつり上げたからである。第一代元首ウィリアム・ピーク、第二代元首ヴァルター・ウルブリスト、初代文部大臣ヨハネス・R・ベツヒャー、作家同盟議長アンナ・ゼガース、……など、西ドイツ側から見れば、それは「国外亡命者」＝コミュニストという図式に他ならず、これが西ドイツにおける亡命作家への不信や冷淡さをおおったと言われている。一九四八年にクラウス・マンが書き送った手紙の中にも、その状況は明確に示されている。

私たちは実にしばしばへなゼドイツに帰らないのですか、なぜドイツで国民の再教育に積極的に携わろうとなさらないのですか」と訊ねられます。……そのような議論のさいに私が強調するのは、なによりもまず次の一点です。へなゼドイツへ帰らないか、ですか？ 全く単純なことです——あそこの人びとが私を望んでいないからです。)

(山口訳)

それでは、フランス側から、ドイツ亡命者についての歴史的研究が全くされてこなかったのはなぜだろうか——。それは、何よりも、すでに言及した一九三九年八月に始まる強制収容および逮捕の問題と、ヴィシー政府による弾圧という、公的に認め難い事実起因している。「自由、平等、博愛」を信条とし、「自由の都パリ」を誇るフランスにとつて、それは神話を崩す汚点以外の何ものでもなかった。まさに亡命ドイツ人たちは、亡命中も、そして戦後も、文字通り歴史に翻弄され続けた存在だったのである。

一九八九年十一月、ベルリンの壁崩壊、東西ドイツ統一からソビエト連邦崩壊へという一連の思いもしなかつた大変動は、「亡命文学」研究にも風穴をあけた。かつての東西のイデオロギーにとらわれることなく、また「国外亡命者」たちの仕事の意味を英雄視することもなく、矮小化することもなく、実証し評価する研究が、ドイツ、フランス双方から始まっている。そしてフランス側の研究は、ドイツ亡命者たちの活動のみならず、パリが「亡命地」として、いかなる役割を果たしたかという点にも、徐々に焦点が当てられているのである。

一九三〇年代パリは、ドイツ亡命者たちにとつて、決して「約束の地」ではなかった。「自由の都」「革命の都」パリという神話が、二十世紀の激動の中で崩れ去っていく時、あとに残るのは、亡命知識人たちにとつて「不毛な都市」としか呼びようのない風景なのであろうか——。私たちは次にそれを考えていかねばならない。

註

- (1) エドワード・W・サイード著、鶴飼哲訳「知的亡命——故国喪失者と周辺者の群像」(『グリオ』第八号、平凡社、一九九四年十月) 一四頁。
- (2) 同論文、一五頁。なおサイードはこの論文の後半で、「亡命」をさらに隱喩的な意味としてとらえ、今日の状況において知識人がもつべき「亡命者の性格」——権威から逃れてつねに周辺へと動き、飼い慣らされず、変革を表象する——について語っている。
- (3) L・A・コーザー『亡命知識人のアメリカ』(岩波書店)  
R・フェルミ『二十世紀の民族移動』1、2 (みすず書房)  
B・バイリントン他編『文化移動』
- (4) 平井正、ベルリン一九二八—一九三三 破局と転換の時代 (せりか書房、一九八二年) 五〇九頁。  
以下ヒトラー政権樹立までの歴史については次を参照。
- (5) デイーター・ラフ著 松本彰他訳『ドイツ近現代史』(シュプリンガー・フェアラーク東京株式会社、一九九〇年) 二六三—二七四頁。
- (6) ラフ同書による(二八五—二八六頁)と、ヒトラーは実際一九三六年までに、「公約」通り経済回復をなしとげ、失業者問題を解消した。
- (7) ヤン・ハンス著、山本允訳「亡命文学」(ヤン・ベルク他著『ドイツ文学の社会史』下巻所収第五章、法政大学出版局、一九八九年) 七〇〇頁。
- (8) 村瀬興雄編『世界の歴史15 ファシズムと第二次大戦』(中央公論社、一九六二年) 八二頁。
- (9) ハンス前掲書 七〇一頁に詳細な亡命者および亡命日リストが掲載されているので、参照されたい。
- (10) 平田達治「激動の時代に抗して—キーペンホイアー書店を中心に」(山口知三他著『ナチス通りの出版社—ドイツの出版人と作家たち 一八八六—一九五〇』所収、人文書院、一九八九年) 一三二—一三三頁。
- (11) なおオシエツキーは、強制収容所にて死に至るが、収容中の一九三八年ノーベル平和賞を受賞した。
- (12) 平田、同論文、一三三頁。なおキーペンホイアー書店は、第三帝国成立以前には、発行点数最高を誇るドイツ有数の出版社。エルンスト・トラー、ヨーゼフ・ロートなど東方ユダヤ人の出版にも精力的であったが、ナチス政府によって出版物の七五％が焚書押収などの処分を受け、廃業同然に至った。
- (13) 山口知三『ドイツを追われた人びと—反ナチス亡命者の系譜』(人文書院、一九九一年) 二二頁。  
長橋美生子「革命勢力の知的結集の貯水池——マリーク社に集まった人びと」(前掲『ナチス通りの出版社』所収)

- (14) 二〇五頁。  
 リストより主な人名を挙げると、  
 第一回——ハインリッヒ・マン、ミュンツェンベルク、トラー、シュヴァルツシルト  
 第二回——ベッヒャー、グラーフ、レーオンハルト  
 第三回——クラウス・マン、ヴェートラント・ヘルツフェルデ  
 \*リスト詳細は、ハンス前掲書、七〇二頁。  
 ハンス、前掲論文、七〇三頁。
- (15) 同書、七〇六頁。
- (16) 同書、七〇七頁。
- (17) 以下オランダの出版人と亡命文学については、  
 平田、前掲論文、一三九—一六五頁。
- (18) 以下スイスと亡命作家については、  
 山口、前掲書、一四八頁。および平田、前掲論文、一三八頁。
- (19) 《Il fait beau à Paris aujourd'hui》de Fred Uhlmann cité par Odile Jung 《L'autre Allemagne》dans *France des étrangers, France des libertés — Presse et communauté dans l'histoire nationale* (Musée d'histoire de Marseille/Paris-La-Défence) Mémoire—Générique Eds. 1990, p. 14.
- (20) 同展覧会カタログは、外国人移民・亡命者と出版地としてのパリ（フランス）との関係を、詳細な年表と共に論及したものである。
- なおフランスにおける第三帝国亡命者研究については、最もまとまった研究は次の通り。  
 G. Babia, J.—B. Joly etc., *Les Bannis de Hitler : accueil et suites des exilés allemands en France 1933-1939*, Ed. Presses Universitaires de Vincennes, 1984.
- Jean-Michel Palmier, *Weimer en Exil : le destin de l'émigration intellectuelle allemande antinazie en Europe et aux Etats-Unis*, Editions Payot, 1988.
- (21) Texte de Willi Münzenberg cité par Jung dans *Ibid.*, p. 14.
- (22) Jean-Michel Palmier (un entretien avec) «Orphelins d'une République fantôme» dans *Ibid.*, p. 18.
- (23) 援護団体である雑誌の詳細については、  
 Rita R. Thalmann《Topographie de l'émigration du III<sup>e</sup> Reich à Paris》dans *Le Paris des étrangers depuis*

- in siècle* sous la direction de l'Institut d'Histoire des Relations internationales contemporaines à Paris, Imprimerie nationale, 1989, p. 93.
- (24) ハンス、前掲論文、七三八頁の引用訳を使用。
- (25) 山口、前掲書、一三六頁。
- (26) 同書、二四―二五頁。
- (27) Jung, op. cit., p. 15.
- (28) H・R・ロトマン著、天野恒雄訳『セーヌ左岸——フランスの作家・芸術家および政治…人民戦線から冷戦まで』（みすず書房、一九八五年）七五―七八頁。
- (29) Jung, op. cit., p. 16.
- (30) 山口、前掲書、二七頁。
- (31) ドイツ自由図書館およびドイツ自由大学については、Thalman, op. cit., p. 100.
- (32) ロトマン、前掲書、七〇―七三頁。
- (33) 山口、前掲書、九六―一〇三頁。
- (34) ロトマン、前掲書、八九―九〇頁の引用訳を使用。
- (35) 同書、一一〇―一二九頁。
- (36) ザール問題とその余波については、ハンス、前掲論文、七三三―七三四頁。
- (37) 山口、前掲書、一四二頁。
- (38) 以下ドイツ人民戦線については、山口、前掲書、一八二―一八三頁。
- (39) ハンス、前掲論文、七四一頁の引用訳を使用。
- (40) 以上、フランスにおける外国人人口の統計や、フランス政府の外国人政策の詳細については、本論註(20)カタログ巻末の年表を参照。
- (41) ハンス、前掲論文、七三七頁の引用訳を使用。
- Karl Retzlaw, «Aufstieg und Niedergang. Erinnerungen eines Parteilarbeiters» cité par Barbara Vormeier «La situation administrative des exilés allemands en France (1933-1945)» dans *Revue d'Allemagne*, Stras-

- bourg, avril-mai 1986, p. 188.
- (42) Thalmann, op. cit., p. 92.
- (43) ロトマン、前掲書、六〇頁。
- (44) ハンス、前掲論文、七三五頁の引用訳を使用。
- (45) 平田、前掲論文、一三七頁。
- (46) ハンス、前掲論文、七〇八頁の引用訳を使用。
- (47) ロトマン、前掲書、三五頁。
- (48) 同書、六〇頁。
- (49) アーサー・ケストラーの回想。ロトマン、前掲書、六一頁の引用訳を使用。
- (50) ハンス、前掲論文、七六五頁。
- (51) 以下独ソ不可侵条約とフランスについては、山口、前掲書、三三七―三四八頁。
- (52) 同書、三三八頁の引用訳を使用。
- (53) 同書、三四四頁。
- (54) 前述のようにミュンツェンベルクはコミンテルン工作員の一人であったが、スターリニズム批判から、一九三八年ソビエト共産党と袂を分ち、雑誌『ツークンフト(未来)』を創刊(一九四〇年五月)した。
- (55) 本論註(20)カタログ巻末年表の統計に拠る。
- (56) ハンス、前掲論文、七六六頁。
- (57) 「オットー・リスト」を含め、ワイシー政権の対独協力についての最新の研究書は、渡辺和行『ナチ占領下のフランス―沈黙・抵抗・協力』(講談社選書メチエ、一九九四年)以下、ヨーロッパからの再亡命の経緯については、山口、前掲書、三五八―三六〇頁。
- (58) ハンス、前掲論文、七六九頁の引用訳を使用。
- (59) 平田、前掲論文、一五九頁。
- (60) 一九三九年六月、在パリ・オーストリア人たちは、レンヌ通りにあるサル・ダンクラージュモン(Salle d'Encouragement)で、エルンスト・トラー追悼集会を開き、これがオーストリア亡命者たちの最後の集いとなった。(Thalmann, op. cit., p. 102.)
- (61)

- (62) 山口、前掲書、三七六―三七七頁。  
 (63) 同書、三六八―三六九頁。  
 (64) 同書、三六八―三六九頁の引用訳を使用。  
 (65) この点については、本論註(20) (22) (23) に挙げたフランス側のいずれの文献においても指摘されている。